

---

# 無限と迷路と翡翠

柳之助

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無限と迷路と翡翠

### 【Nコード】

N2242R

### 【作者名】

柳之助

### 【あらすじ】

無限書庫司書長、ユーノ・スクライア。

彼を取り巻く彼女たちの終わってばかりの続き続ける物語。

ユーノが主人公です。

ユーノ君好きに読んでいただけると幸いです。

## episode : prologue

新暦七十七年。

六月十七日。

ミットチルダのとある教会。

そのとある部屋。

そこにいたのはタキシードの青年。

というか僕だ。

ハニーブロンドの長髪で眼鏡を掛けた顔はかなり女性的である。

自分で思っただけ悲しくなってきた。

今年で二十二年の付き合いになる自分を見直す。

変なところはない……と思う。

鏡の前でうなっている。

「おい、ユーノ。そろそろ時間だろう」

ドアから声をかけてきたのはクロノ・ハラウン。  
十二年来の親友だ。

「分かってる」

クロノに返事をして部屋を出る。

緊張してきた。

一生に一度……のはずの晴れ舞台だ。  
会場に向かう。

その途中で。

「まあ、落ち着け」

「落ちつけないよ……」

「慌てても失敗するだけだぞ」

「他人事だと思つて……」

「他人事だからな」

前言撤回。

親友などで無い。

腐れ縁で十分だ。

クロノが僕より前に出て、会場への扉を開ける。

「行つて来い」

クロノに送り出されて、会場に入る。

そこには数少ない僕の友人たちがいて、僕を祝福してくれている。

僕ことユーノ・スクライア。

本日、結婚します。

扉からバージンロードを通つて、彼女が歩いてくる。

その姿を見て回想してみる。

相手は無限書庫の司書である。

初めて会つたのは五年前だったか。

無限書庫司書長として最初は接していたけど、四年前に付き合いだした。

僕が熱愛告白したのだ。

嘘です。

彼女から告白されて、なんとなくOKした。

周りは僕がなのはやフェイト、はやてのうち誰かが好きだと思つていたらしいのでかなり驚かれた。

幼馴染なだけでそういう関係ではないのに。

その証拠に僕が結婚しようと思ったのは彼女である。  
何故そう思ったかというと、これもなんとなくだ。  
……いや、自分なりに考えたすえの決断だけど。  
まあ、とにかく。  
このぼくはなのはやフェイトやはやてではなく。  
彼女を好きになったのである。  
彼女が僕の横に来て。  
神父さんが結婚の祝詞を読み上げる。  
そして。  
誓いの言葉を聞かれ、

「誓い」

ます。

とは言えなかった。

世界が。

世界がひっくり返る。

世界がシエイクされる。

天動驚地。

轟音と悲鳴。

破壊と振動が僕を襲う。

頭部に衝撃が来て、視界が暗転する。

なんじゃそりゃ。

意識が浮上する。

眼を開ける。

瓦礫の山が眼に映る。

教会が崩壊したのか。

体中が痛い。

周りを見て。

ふと、注視したのは。

「え？」

手。

瓦礫の山から。

突き出した手。

それは。

手だけだけれど、分かる。

彼女だ。

「

あ  
「

何かが。

何かが壊れた気がする。

意識はあるけれど。

意思が壊れる。

視界が再び、暗転した。

世界はこんなはずじゃないことばかりだ。

もう嫌だ。

その上空。

突如発生した地震により引き起こされた惨劇を見る者は

「 傑作ね」

「酷いことを言いますね」

いる。

金髪をポニーテールにした十代半ばの少女。

銀髪のシスターの同じく十代半ばの少女。

二人は円形の魔方阵の上に立ち、下界を見つめる。

「何も起こらなくておかしいとは思ったけど、まさかこんなで  
ん返しがあるとはさすがに驚きよ」

「さしずめ打ち切りになった少年漫画のようですね」

下界の惨状が何でも無いかというように二人の会話は続く。

「やっぱり、あんなモブキャラじゃだめよ。ちゃんと主役級じゃな  
いと」

「主役級……ですか」

「そう。……もういいわ。この世界は終りね」

「行きますか？」

「ええ」

魔方阵が輝く。

「何としても」

二人を光が包み、

「 ユーノ・スクライアを幸せにして見せる」

消えた。

新暦七十七年。

ミットチルダで震度七越えの突如大地震が発生。  
死者数万人の惨劇。

その中に。

ユーノ・スクライアの名前もあった。



**episode: prologue (後書き)**

なんとなく、衝動で投稿しました。

多重クロスの『流転の悪役』も連載中ですが、そっちをメインでこ  
っちは月に一、二話投稿したいです。

episode：高町なのは？（前書き）

きみはどうして笑っていられるんだろう。

きみはどうして僕に笑いかけられるんだろう。

きみは僕のせいで人生を歪めてしまったのに。

それでも飛んでいるきみを見ていたいという、

ぼくはなんて罪深いんだろう。

## episode：高町なのは？

時空管理局本局。

そこに無限書庫はある。

その名の通り、無限の情報が存在するそこは長い間使われていなかったが、十一年前にとある少年によってその機能は使われ出した。現在では管理局の情報を担う無限の書庫。  
そのこの主の名をユーノ・スクライアという。

無限書庫。その司書長室に彼はいた。

長い金髪を緑のリボンでまとめている青年だ。

その翡翠の瞳は机に積まれた書類に向かっている。

黙々と作業を進める青年。

そこに、

「コーヒーが入りました」

湯気を昇らせるコーヒーが机に置かれた。

青年よりも長い腰まである漆黒の髪。紅い瞳の右下には泣きぼくろがあり、肉感的な体を持っている女性だ。

青年は彼女に、

「ああ、ありがとう。エステイカさん」

「仕事ですので。スクライア司書長」

青年 ユーノ・スクライアの礼に小さく笑みを浮かべる女性  
エステイカ・クラウン。  
ユーノは無限書庫司書長であり。  
エステイカは副司書長だ。  
コーヒーを渡したエステイカは部屋のソファに座り、携帯端末を  
見て、

「あら」

「ん？」

声をあげたエステイカ見る。

彼女は驚いた風に口に手を当てて、口元を歪め、

「いえいえ、発見されたりしいですよ」

「何が？」

「四人目の死体」

「……」

「一か月前。」

それは起きた。

時空管理局のお偉いさんが殺されているのが発見された。

二週間後には二人目が発見され、先週には三人目も発見された。

「今回も三人目と同様に争った形跡があるみたいですねえ。どちら  
も戦闘適正無いのに不思議ですね？」

「そうだね」

仕事の手は止まらない。

まるで関心が無いというように。

口元の歪みは消えない。

まるで面白くてたまらないというように。

「ごういう人たちを殺人鬼って呼ぶんですかねえ？私には理解できませんわ」

「そうだね」

「コーヒーを一口。」

「僕にもわからないよ」

「あれ？ユーノくん？」

「なのは？」

日替わり定食Kのカキフライを口に運んで、視線を上にあげた時、本局の食堂。

あまりエンカウント率の高くない幼馴染がエンカウントした。

「ひさしぶりだね。半年ぶりくらい？」

「そうだね。JS事件の打ち上げ以来だからそんなものかな」

訂正。エンカウント率の低い幼馴染がエンカウントした。

なのはは日替わり定食Tのトマトスパゲティをお盆に載せたのはがいた。

「ここ、いい？」

「いいよ」

ありがと、と言ってユーノの向かいの席に座る。

なのはが合掌したのを見計らって、

「珍しいね、きみが本局に居るなんて。一人かい？」

「うん」

パスタを結構大雑把にフォークに巻きつけて、口に運ぶなのは。それを見て、ユーノもカキフライを運ぶ。

モグモグ。

サクサク。

「それでね」

「うん」

モグモグ。

サクサク。

「最近噂の事件私たち機動六課が当たることになったの」

「……………」

モグモグ。

「……………？ユーノくん？」

「いや、なんでまた？」

モグモグ。

サクサク。

音が再会した。

「JS事件から私たち結構暇だからね。管理局も空いている人材を  
ほったらかしいにはしたくないんだろっね」

「ふうん。ま、六課は保有ランク異常に高いからね……………」

隊長副隊長はオーバースにニアS。部隊長なんかはSS-だ。

元新人の四人もすでにAAやAだ。

モグモグ。

サクサク。

「それに今回の被害者は私はいろいろお世話になったからね」

「……………」

モグモグ。

。再び音が途切れる。

「？」

「カキフライが無くなった」

米を食べだす。

「それで、きみが本局に来たのかい？」

モグモグ。

パクパク。

音が変わる。

「ううん、それは関係ないと思うよ。たまたま私が暇だっただけ」

「そっか」

「うん」

モグモグモグモグ。

パクパクパクパク。

合掌。

「じいちゃん」

「じいちゃん」

「まあ、頑張つて。なにか資料が必要なら無限書庫までどうぞ」



「うん、ありがとう。ところでユーノくん」

「なに？」

なのはは空になった皿に目をやり、

「この食堂の日替わり定食なんでAからZまであるの？」

もう日替わり定食じゃないよね、と首をかしげるのは。

「ああ、簡単だよ。AからZまで日替わりで食べてねっていう事」

「なら、日替わりじゃなくて普通の定食でもいいんじゃない？」

「それは言わない約束なんだよ」

「そうなの？」

「そうなの」

ミルクティーを飲むのは。

コーヒーを飲むユーノ。

「じゃあ、なのは悪いけどお先に」

「うん、またね。ユーノくん」

軽い挨拶をして席を立つ。

お盆を持って席を離れ数歩進んだところで振りかえり、

「ねえ、なのは」

「ん？」

「きみは今」

幸せ？

episode：高町なのは？（後書き）

だいぶお待たせしました。すみません。

基本会話メインです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2242r/>

---

無限と迷路と翡翠

2011年10月8日17時23分発行